

100回を数えた松戸での「朗読と文学の会」(上)

天に星、

地に花、人に愛

毎月第3水曜日の午後1時半、千葉県松戸市のみのり台駅前の市民センター(公民館)に30~40人が参加する。参加者の年齢を合計すると、2000歳を超えるその会合は、今年8月に通算100回を数えた。二つの数字を掛け算すると、延べ20万歳となる。平たく言えば、人生を顔や身体に刻んだ人々が互いを知るために繰り返してきた歳月が20万年とした。集まる目的は、自己の存在を表現するため。なぜなら、この会では

「人間は表現する動物である」という宣言をしている。

表現の手段としては、朗読を最も有効な健康維持法とする。また、この会に毎月出席参加する人が、延べ20万歳となる。平たく言えば、人生を顔や身体に刻んだ人々が互いを知るために繰り返してきた歳月が20万年とした。集まる目的は、自己の存在を表現するため。なぜなら、この会では

この会のルーツは、実は隣駅・八柱の喫茶店主と異音奇会の堀川静雄会長の会話であった。松戸市民と街の活性化を目指した取り組みとして、先述の「宣言」にあるように人間のもつ表現力にシゲキを与える発表の場の提供を思考

参加者の顔ぶれ

今年の7月19日、8月23日は、当会の第99回、100回という記念の回を迎えた。9月20日は101回となる。そこで以下には最近の本会で表現活動している方々にフォーカスし紹介したい。通例、久保田幹事の軽快な司会で始まり、つぎに小山



第100回記念の会場風景(8月23日)

地元力発見!!

佐藤建吉

「洗楓座」代表

47 会長は挨拶となる。二人はともに高知県の出身、さすが「ちやんこ」

輪が広がった。

冒頭の小見出しの「天、人」は、歳月を重ね

した。これが長く継続している要因には、表現が合目的であったことのほか、二人の熱意と人柄、そして懇親会という憩いの場の作用も貢献し、次第に参加者を増やしている。これが長く継続している要因には、表現が合目的であったことのほか、二人の熱意と人柄、そして懇親会という憩いの場の作用も貢献し、次第に参加者を増やしている。



茨木のり子の朗読/田中泰子

こうして、「朗読と文学の会」は恒例&高齢行事として、なおシゲキと至幸を求めて実に8年以上も継続してきた。この間、発起人の二人は、すでに鬼籍に入った。現在は、小山勝氏が二代目会長として、幹事の久保田賢三氏とともに本会を導いている。

茨木のり子の詩作を取り上げた。99回では、「大男のための子守唄」のほか3作、100回では、代表作「わたしが一番きれいだったと



詩吟で表現/恵風琴景



「楯の会」の当時を述解/本多清

2番手は、恵風琴景さん。いつも和装で、世相寸評の「つかみ」のトークの後、関連した題材を詩吟で表現する。その構成と節回しには、長年の吟詠歴が裏打ちされている。

つづいて、本多清さん、75歳。実は三島由紀夫の「楯の会」の第1期生。100回の会では、特別に三島との係わりや教え、秘話について当時を述解した。本多氏は数字の語呂合わせ&意味つけの名人でもある。多士済々の会である。

(つづく)

1950年山形生まれ。

東京都立大院卒。元千葉大学院工学研究科准教授(金属疲労専攻)。金属疲労の研究のほか、他分野のテーマの研究開発に努めるとともに日本各地の地域おこし活動に従事する。ローカル鉄道と地元の酒蔵のコラボで地域再生を図る地酒「鐵の道」の製造・販売を企画、すでに10件を超える銘柄を送り出している。一般社団法人洗楓座代表。一般財団法人「エコミュージアムいすみ」代表。